
神崎紫電
SHIDEN KANZAKI
ブラック・ブレット
BLACK BULLET
[黒の銃弾]
ZERO
はじまりの血 雌伏篇
天童民警文庫

ブラック・ブレットZERO

はじまりの血 雌伏篇

神崎 紫電


ブラック・ブレット
BLACK BULLET
［黒の銃弾］
はじまりの血 雌伏篇
ZERO

BLACK BULLET ZERO
CONTENTS

DESIGNED BY AFTERGLOW

BLACK BULLET ZERO

短編小説

ブラック・ブレット［黒の銃弾］

はじまりの血　雌伏篇

ZERO

SHIDEN KANZAKI
神崎紫電

掌で触れた机の天板は冷たく、フェイクの木目は人工的でツルツルとしていた。

そのまま指を滑らせていくと、机の端で手が止まる。中学生の時分使っていた物より面積にすれば幾分広いが、ただそれだけのことだった。

縦幅にしろ横幅にしろ限界はあり、決して無限の広がりはない。

里見蓮太郎は顔を上げ、ぐるりと周囲を見渡す。

黒板は綺麗に掃き清められ、机がミリ単位で整然と並べられている。雑多な雰囲気はなく、代わりに生活感もない。床はワックスが掛かっていたが、薄い光沢の下、板張りの目地は黒ずんでおり、傷もあちこちに散見される。

この床板を大勢が踏み、幾多の卒業生の悔し涙をすすり、歓声を聞き、情熱の汗を嗅いだのだろう。

どれも自分とは縁遠いものだった。

人の失せた教室内に蓮太郎はいた。

白球を打つコキンという快音がしたと思うやワッと喚声が上がる。

窓際まで行って窓を開けると、野球部とサッカー部がシェアしたグランドでは、泥だらけになって走り込んでいた。

自分たちの先輩に当たる人間だ。彼らにとっていまは春休みに当たるはずだから、休日にもかかわらず部活に出てきたことになる。

蓮太郎は窓枠に手を突きながら振り返り、もう一度がらんどうの教室を見た。

教室に生活感がないのも当然だった。新学期はまだ始まっていない。

勾田高校の受験をパスした蓮太郎は、もう数日もすれば騒々しい入学式と共にこの教室のどこかで暮らし、三年間学び舎としてこの高校にお世話になることだろう――なんの目的も持たずに。

眼を細め、窓の外の向こうに見える高さ一・六キロ強の石版モノリスを見据える。

俺はなんのために生きているのかと、心の内で自問する。

即座に、すべてのガストレアを消滅させるためだ、と声が返る。

九年前の絶滅の日、人類終焉の瀬戸際でたまさか拾った命になにか意味があるとしたら、それは殺せるだけのガストレアを殺し、そして最後の一匹とも差し違えるためにあるのだ。

こうして教室を見学に来れば、一つ高校生になってやろうかという気概も湧くかと期待したが、どうやら無駄足だったらしい。

きっと自分は、まともな高校生を演じきれない。醜いアヒルの子のように、終生まで群れの中で違和感を抱えながら生きていくことになるという自虐的な自信があった。

中学では木更以外、親しいと呼べる人間はいなかった。

高校でも友達が欲しいと思わない。出来るとも思えない。九年前のガストレア大戦に魂を呪縛され、以来耳元で死神の息づかいを聞くようになってしまった自分には……。

その時、懐の携帯電話が震えた。発信者名は天童木更とあった。
『あ、里見くん、いまどこ？』
蓮太郎は教室内に視線を巡らせる。
「別に。自分の部屋だよ」
『そう、じゃあ好都合ね』
木更は、息を弾ませて続ける。
『今日契約が完了したから、これで例のビルの三階は名実共に私たちの城になるのよ。一緒に行くわよね？』
「ああ、あれか」
木更は名門・天童家の子女でありながら天童を出奔している。自分たち二人が揃って民警のライセンスを取得したのは、つい最近のことだった。
零細ながら事務所を経営するということは、会社を興すということだ。
腎臓に障害を抱えている彼女は社長職に退き、代わりに戦闘職に就くことになった蓮太郎は、先日自分の相棒となるイニシエーターに引き合わされた。
ガストレアとの混血とも言える少女と。
『じゃあいまからこっち来て、勾田駅前で待ち合わせましょ』
「あ、おいまだ行くとは一言も――」

言い終わる前に通話は切れてしまっていた。

無機的に通話時間を表示する携帯電話を眺めてから、待ち合わせの時刻を確認して、スリープボタンを押す。

「……民警、か」

季節も三月の下旬になったというのに、いまだ寒冷前線は東京エリアに居座って、はた迷惑な寒気をばらまいていた。

そんなエリアの一画、勾田市のガヤガヤした大通りの脇で、郵便ポストの前に立ち尽くしたふたり組というのは、周囲からさぞかし浮いて見えることだろう。

事実、こうしている間も通行人の怪訝な視線が背中を刺すのを感じる。

だが、その視線も、おそらく隣に立つ少女には届いていない。

震える手で郵便ポストの口に封書を落とした黒っぽい服装の少女は、眉宇に皺を寄せながら真剣に手を合わせて祈りを捧げる。

黒のスカートに長袖の黒のハーフコートという、黒い服装を好む少女は、白い肌だけが好対照をなしている。

長髪に隠れかけた陰のある美しさは、若くしてすでにこの世のものとは思えないほど完成さ

れていた。
「ちょっと里見くんッ？　ちゃんとお祈りしてないでしょ」
と、少女、天童木更が、いつの間にか横目でこちらを睨んでいることに気付く。
図星を指されて思わず顎を引いたが、こうなった以上隠し立てする気も起こらず、降参を示すために両手を軽く上げる。
「本当に後援者探しなんて必要なのか？」
「必要に決まってるじゃない。ウチには、里見くんが使う武器弾薬を負担するお金なんかどこにもないのよ」
蓮太郎は、無表情で佇立する郵便ポストを見遣る。
「それで司馬重工に願書を出すわけか……」
祈ったところで、あんな大企業が、設立したばかりで実績もクソもない民警に出資してくれるとも思えないのだが……。
「私だって、あんな会社に頼りたくなんか無いわよ」
「他の武器会社はどうだったんだ？」
木更が苦虫を噛み潰したような表情をする。
「……全滅」
「木更さん、たしか昔パーティで司馬重工の令嬢に会ったことあるって言っていたよな」

木更は何か嫌なことでも思い当たったのか、不機嫌そうに腕組みをする。
「嫌な奴よ。七年くらい前かしら、立食パーティで、あの女は可愛い日本人形抱えて歩いてて、私にも触らせてって言ったら舌出してきてね、腹が立ったから私が足引っかけたら、アイツが私の靴に画鋲落としてきて、そこからは泥沼の戦いよ」
蓮太郎は感慨深げに腕組みする。
「珍しいな、誰とでも仲良くなれる木更さんが合わない奴がいるなんて」
「ま、司馬重工がダメだったら、その時他に金策を考えるしかないわね。それより事務所の方を見に行きましょ」
喜色満面の木更は「事務所♪　事務所♪」と、節をつけながら体を揺すっている。
「何がそんなに楽しいのかね」
「あーら、私たちこれで一国一城の主になるのよ」
「そんな大層なもんなのか？　しかも事務所の下見すらせずに金払ったんだろ。大丈夫なのかよ」
「だって不動産屋さん、緊急で入ったとっておきの物件で、いま決断しないと明日にはよそに借りられちゃうって言ってたし——さ、行くわよ！」
見ればもう木更は歩き出していた。
そこはかとなく不吉なものを感じながら、木更に先導される形で目的の場所まで向かう。

勾田市で有名な飲み屋街のアーケードをくぐった辺りから、明らかに周囲の景色が変わった。各種飲食店から漏れるラーメンスープや焼き鳥タレの甘い匂いが渾然一体になり、ビラ配りに道をふさがれる。

まだ開店前の飲み屋街を抜けると、今度は美女の顔がアップになった看板ばかりが散見される。画像編集ソフトで補正した上に白で飛ばしたのだろうシミ一つ無い女性に、蓮太郎は背筋がムズムズする。

「本当にこの通りで合ってるのか？」

「えーと、合ってるわ」

「でもさっき、ストリップ劇場って……」

「め、目の錯覚よ」

そんなはずないだろう。

そして、行きつ戻りつすることしばし、二つのビルに挟まれて肩身が狭そうに縮こまるビルの前で立ち止まった。

蓮太郎と木更は、しばらく口を半開きにしながらビルを見上げていた。

四階建ての建物で、半分朽ちかけている。嫌な予感がしながら横目で木更を見る。

「おいまさか、この建物じゃないよな」

「一応そうなんだけど、里見くん、どう思う？」

「どうって」

左右に素早く視線をやる。ゴミ集積場には、痩せ犬がゴミ袋に顔を突っ込んでいて、床には吐瀉物の痕と饐えた匂いが充満していた。錆びるままに放置された自転車がひとまとめになって、ロープでぐるぐる巻きになっている。

「場末の探偵事務所みたいだな」

「ま、まあ、中はリフォームされてピカピカかもしれないしね！」

やたらポジティブな木更とは対照的に、蓮太郎はいますぐ見なかったことにして回れ右したい気分だった。

暗い階段を恐る恐る上っていく。

水商売風の一階と二階の建物は全力で見ないようにして、彼女がリースしたという三階まで行くと、おかしなことに玄関口の扉の向こうから話し声がする。

怪訝な表情をしながら扉に耳をつけると、漏れ聞こえてくる、複数の男性の笑い声。

間違いない。中に誰かがいる。

まさか幽霊じゃないだろうなと思いながら、恐る恐る錆びた扉を開けると、途端に隙間からキツいアルコールとタバコのにおいが流れ込んできた。

さらに扉を開けて首を差し込むと、安普請の扉はギッと音を立てる。

と、中の話し声がピタリと止んで、麻雀卓を囲んで座っていた四人組がこちらを見た。

「ああ？　誰やおどれら」
剣呑（けんのん）な声を出したのは、頬に傷のある男だった。
「何の用や。ふざけとったら承知せんぞコラ」
山芋顔の男や、髪の毛が逆立った男が席から立ち上がる。全員目つきは剣呑。黒い服に派手な柄物のシャツを着ている。
「ア、アンタ等こそ何もんだよ」
ウンコ座りでタバコを吸っていた男が、タバコを床に吐き捨てながら言う。
「ここは元々、俺らが無期限で借りさせてもらってんだよ。どうしても出て行って欲しいっちゅうなら、誠意見せんかい」
蓮太郎はようやくこいつらの正体に見当が付いた。
暴力団新法が制定されて以来、あからさまな金品の要求が出来なくなったため、この手の連中は『誠意』という遠回しな単語を使うようになったのだったか。
物件にヤクザを不法占拠させて新しい借り主から立ち退き料を巻き上げる。まだ残っていたんだなと思う。
ヤクザもガストレア戦争の影響で不況なのだろうか。
段々と頭がクールダウンしてきた蓮太郎とは対照的に、ヤクザの言葉を真に受けて泡を食っているのは木更だった。

電話で不動産屋をコールするが、どうやら不通らしく、絶望的な表情を浮かべてこちらに視線で助けを求める。

沈黙している蓮太郎を見て竦み上がっていると判断した山芋顔の男は調子に乗って、蓮太郎の周りをくるくる回りながら「コラ」「ボケが」と、散々汚い言葉を吐き散らしている。

さて、これからどうするべきかと手をこまねく。こいつ等をぶっ飛ばすのは簡単だが、あとあと営業妨害などの搦め手から来られると面倒だ。

と、山芋男が、そこで木更の肩に手を伸ばす。

「とりあえず坊主は土下座で詫び入れてもらうとしてだな、おっぱいの大きい姉ちゃんにはだなぁ――」

「――おい、逃げろ！」

蓮太郎はぎょっとして叫ぶが、山芋男はそれを見て一層居丈高になる。

「一人もこの部屋から出しゃしねぇ――」

「――違ぇよ！　アンタ等に言ってるんだよ」

「は？」

ヤクザはパチクリと目を瞬かせる。

と、山芋男がつんのめって腕ごと前に釣り込まれたと思った瞬間には、手首を支点にくるりと宙で一回転して、大音響と共に麻雀卓を巻き込み叩き付けられる。

「グ……ガ……」
雀卓の中央に埋もれたまま白目を剝いた男は、それきり動かなくなる。
一瞬の出来事に他の三人は、完全にフリーズしていた。
黒髪の少女は、俯きながら、プルプルと怒りに身を震わせていた。
「『天童民間警備会社』って、名前だってもう決めてたのよ。……その華々しいデビュー初日がこんなことになってぇぇ〜〜〜」
木更が怒気も露わにパアン、と床を踏み鳴らす。
「ちょっとアンタたちッ！　責任取りなさい！」
ヤクザが青くなって一歩下がる。
いつの間にか狩る側から狩られる側に転落していたヤクザの心中や如何ばかりだろうか。
だがそれを推し量る時間も、どうしてそんな危険な手合いを怒らせたのかという懺悔を行う時間も、彼らには残されていなかった。

三分後。
木更がパンパンと手をはたく周囲の床には、気絶するまで投げ飛ばされたヤクザが死屍累々の様相を呈して転がっていた。

なにもかもが圧倒的だった。
あの細腕で、掴みかかる男の腕をねじり上げ、投げ飛ばしてしまうのである。大の男がくるりと回転して地面に叩き付けられる様はなにかの冗談のようでさえあった。
それも、彼女がやっている合気術ですら、手慰みに習ったものに過ぎない。
彼女の真価は、刀を持ったときにこそ発揮される。
木更がツンと顎を上げると腰元まである黒髪をパッと掻き上げる。
「里見くんもこれからガストレアとの戦闘職担当ならこれくらいは早くできるようになってね」
悪意のない戯れ言と、普段なら苦笑一つで流せる会話のはずが、今日だけは出来ない。
「なんで、木更さんなんだろうな」
木更は優しくかぶりを振る。
「その話はもう済んだでしょ。私は腎臓の障害があるから長時間の戦闘には向かない。だから事務職に就く。とっても合理的じゃない」
「でも！　でも木更さんは、合気術だけじゃない。剣を持てば天童流の歴代でも最強クラスの達人なんだ。それをこんな——」
出し抜けに唇に木更の人差し指が当てられて、びっくりして顔を上げると。意外なほど至近にある木更の顔。目尻が下がり、口元にたおやかな微笑が刻まれる。

「私は運命論者じゃないけど、そのことに関しては、もう諦めが付いてる」
「本当に？」
「私の命はガストレアを葬るためにあるんじゃない。お父様とお母様を殺した天童を狩るためだけに使うの。だから、ガストレアへの復讐は里見くんに任せるわ。私は本丸を狙うためにいまは力を温存しなきゃいけないの」
「…………」
蓮太郎と木更は九年前、ただの不幸では片付けきれないほどの厄災に見舞われ、様々なものを失った。
蓮太郎はすでに自分のことについては諦めが付いているし、仮にその厄災が人為的なものだとしても、相手を見つけ出して殺害しようとまでは思わない。
なので、最初に『天童を出奔して、雌伏の後に仇を討つ』と木更に持ちかけられたとき、戸惑ったが、最終的には頷いていた。
自分がいる事で、木更の復讐が行きすぎることへの抑止力になるのではないかと思っていたからだ。
だがこうして会話の端々に木更の決意の固さを見るにつけ、あの時の自信は形を失っていく。
果たして、自分で木更を止めきれるのかと。
木更はほこりっぽさに辟易した表情で窓まで行って両手で開け放すと、黄金色の夕陽が木更

の姿をライトアップする。
「あー、いい風ね」
そのまま窓の縁に腰掛けながら、うなじの髪を掻き上げる。風になびく髪は、西日が当たってオレンジに染まる。
その挙措動作の一つ一つがあまりにも美しくて、蓮太郎は彼女から目が離せなくなり、動悸が激しくなる。
──もう一つ、天童の家を出て木更と行動を共にするようになったのには理由があった。
「綺麗だ」
しまったと思って口を押さえる。思考が口から漏れてしまった。
木更は目を丸くすると、慌てて顔の前で手を振る。
「ヤ、ヤダ里見くん、急にどうしたのよ」
まんざらでもなさそうな木更の反応に、ゴクリと唾を飲んで、拳を固める。
そして萎えそうになる決意に喝を入れ、今日こそは、と一歩踏み出した。
「き、木更さん。実は俺、き、木更さんのことずっと──」
「──素敵だ」
「は？」
蓮太郎は声の方に振り返ると、気絶から回復したヤクザの一人が熱い瞳で木更を見つめてい

た。

「あっしは四階で金貸しをやってる阿部(あべ)といいます。さきほどのお手並み、ただ者ではないとお見受けします。一体アンタ、何者なんです?」

木更はパッと髪を払う。

「天童木更。今日からこのフロアを借りて民間警備会社をやります」

「姐さん、と呼ばせてくだせぇ」

「いいけど、このフロア、あなたたちが汚したせいでヤニくさくてしょうが無いわ。片付けておきなさい」

「いや、しかし筋者(すじもん)が掃除なんて」

「片付けておいて」

「あっしたちにもメンツってものが——」

「片付けておいて」

「……へい」

阿部氏は、気絶している仲間を蹴り起こして、人事不省(じんじふせい)の仲間に肩を貸して「一旦失礼します」と言ってすごすごと上の階に帰っていく。

蓮太郎は詰めていた息を吐いた。

「上の階は金貸しか」

「でも部屋は上の階の人にリフォームしてもらえそうだし、結果オーライじゃない。ここ全部、私たちの城になるのよ」

　そう言って大きく手を広げた木更の視線を追うと、ヤニで黄色くなった天井と、廃品置き場から拾ってきたのではないかと見紛う合皮ソファ。革地に積層（せきそう）した汚れは、容易（ようい）なことでは落ちそうにない。

　築何年すら定かではない、古ぼけた建物の古ぼけたフロアだ。

　だが、静寂（せいじゃく）の中、フロアを見渡していると、わずかな高揚感（こうようかん）を感じる。

　叶うかすら定かですらない自分の両親捜しと、木更の両親の仇のあぶり出し。

　すべては、いま、この部屋から始まるのだ。

「里見くん、例のイニシエーターとは、その後どう？」

　邪気（じゃき）のない木更の言葉に、だが楽しくなりかけていた気分が一気にしぼんでいくのを感じる。

　そういえば、家に帰れば嫌でも『アレ』と顔を合わせなければならないのだったか。

　まったくもって気の進まない作業だったが、イニシエーターを教え導くのも、プロモーターとして国際イニシエーター監督機構（IISO）から課せられた仕事の一つだ。

　そう――仕事。

　仕事は楽しいものばかりではない。自分がやるのもそういったものの一つだと思えば乗り切れる。

蓮太郎は言葉を選んで木更の問いに答える。
「一応大人しくしてる。大人し過ぎて使い物になるのかすらわからねぇよ」
木更の瞳が冷たく細められる。
「気をつけてね里見くん。アレは人の形はしてるけどガストレア予備軍なんだから。変な真似をしたらキチンと殺すのよ」
「そうだな」
冷酷（れいこく）に首肯（しゅこう）してから、だが思考の片隅で疑念が鎌首（かまくび）をもたげる。
開始因子（イニシエーター）と加速因子（プロモーター）。彼らは二人一組の戦闘員。
相互不信に凝り固まった状態で、果たしてペアなど務まるのだろうか。

天童を出奔して自活を始めた直後は、蓮太郎も木更も金銭面ではかなりの苦労を強いられた。
貯めていた小遣いで幽霊屋敷同然のカントリーハウスを買い上げた木更とは違い、天童の養子としてもらわれた蓮太郎にはそもそもの蓄えがあまりなかったので、ボロアパートを借りた。
木更に一緒に住むよう誘われたが辞退した。
当初はなぜ木更との同居を蹴ったのか自分でも理由がわからなかったが、八畳一間に移ってほどなくして、理解した。

自分は、天童の家に息苦しさを感じていたのだ。

結局天童の養子になって菊之丞に目を掛けてもらって、だが最後には息苦しさ以外の何も残らなかった。

こうして一人になって、ようやく自分は自由になれたと思う。我ながら、どうしようもない。

時の流れから置き去りにされた部屋で過ごす時間は、何も起こらない代わりに、限りなく優しかった。

だが、その優しき安寧も終わりを告げた。

アパートが安らげる場所だったのも、三日前の話だ。

スーパーに寄って食材を買ってから自宅に帰り着く頃には、時刻は夜の七時を回っていた。

部屋に電灯が付いているのを確認しながらサビで軋む鉄階段を上っていく。

夜気に冷えたドアノブを握ったまま、しばし黙考する。

やがて、中にいるだろう少女に対する態度を決める。

何をするでもない。緩慢な無視を弾よけにして、会話を避ければいい。

大きく息を吸うと、ただいまも言わずにノブを回して玄関口で靴を脱ぐ。

だがつい顔を上げ、室内にその姿を求めてしまう。

いた。

窓際布団敷きの一画に借りてきたネコのように小揺るぎもせず膝を抱え込んで座っている。

髪留めでも買ってやるべきなのか、伸び放題の髪は木更と違いややクセがある。裾が擦り切れたオーバーオールは明らかに丈が合っていなかった。

三日前、蓮太郎は藍原延珠という少女とペアを組んで一緒に住むことになった。

見知らぬ人間と一緒に住むことにも、それが半ガストレアだということにも嫌悪しか残らなかった。

延珠が冷たい表情で俯いて、必要最低限の言葉しか発しなかったのは、蓮太郎にとってむしろ救いだった。

この少女がもっと人間的で、色々思索し、自分よりも明敏さを示し続ければ、蓮太郎は嫌でも目の前の少女を人間扱いしなくてはならなくなる。それでは困る。

こいつは人間ではないという価値観を堅持し続けるためにも、目の前の少女は非人間的であり続けなければならないのだ。

彼女を家まで連れ帰った蓮太郎は「お前の場所はここだ」と指差して、自分の部屋の一画を延珠に切り分け、それで事足れりとした。

爾来、延珠は律儀にもその狭い世界の枠内で暮らしている。

なにかを考えているのか、なにも考えていないのか。その諦観に凍りついた表情からは何一つ窺えない。

周囲に首を巡らせる。

わずかに生活の痕を探し求めれば、キッチンに昼食代わりに置いていったコンビニのおにぎりが消費されているくらいのものか。

「おい」

蓮太郎はコートを脱ぎながら、自分から少女に話しかけていた。

「メシの材料買ってきたぞ。支度するから、手伝えよ」

スーパーの袋を掲げてみせると、延珠はこちらを一瞥したきり黙殺を決め込む。

が、そこでグギュルルルル〜、という悪魔の咆哮のような腹の音が室内に響く。

少女はわずかに頬を染め、そっぽを向く。

「お前の腹の虫は手伝った方がいいって言ってんぜ」

延珠はわずかな逡巡ののち、無言で立ち上がって蓮太郎の横を通り過ぎると、戸棚から皿出しを始める。

蓮太郎は腰に手を当て、鼻から息を吐くと、一旦面倒な居候のことは頭から閉め出してエプロンを背中で結ぶ。

買ってきたもやしに、スープストックを使って簡易スープを。

就寝まで時間が無いので、メインは焼きうどんで済まそう。

自分以外に作って食わせるという保護者責任が生じたため、最近料理を勉強している。腕の方は、まあ、これからというところ。

もとより時間を惜しんで生きるタチの蓮太郎は、何よりも効率とスピードを重視。あっという間に二品作り上げると火を止め、皿に盛りつけて、いただきますをする。
正面に座った少女は唱和しないが、自分の方も彼女に歩み寄る気はさらさらないので、それを咎めるつもりは毛頭無い。
これは共同生活ではない。
お互いが同じ部屋、同じ空気を共有しながら行う『共同生活』という演目のパントマイムだ。
蓮太郎は目の前の生命体に対してとっくに理解を放棄している。
こいつは半分ガストレアなのだ。人間と同じ尺度で考えても仕様のない話だ。
スプーンを逆手持ちしている延珠は数度口に無言でスプーンを運び、わずかに顔をしかめる。
「おいしくない」
「ふん」
少女はスープから視線を上げて上目遣いにこちらを見る。
「お前に荷物が届いていたぞ」
延珠がスプーンで指差す方向を見ると、さきほどは気付かなかったが、ダンボール箱が置かれている。
荷物を取って返し、差出人を見ると、木更からだった。
中を開いて、眉をひそめた。

少女が無表情に聞く。

「なんだったんだ」

「……制服だ。今度行くことになる高校のな。いらないって言ったのに」

延珠は気怠げにスプーンでスープをかき回しながら言う。

「私はよく知らないのだが、学校はみんなが勉強しに行くものなのだろう？　なら、行けばいい」

「行ってなんになる」

押さえがたい怒りが混じった声で少女を睨む。

「九年前、全人類の十分の九以上が死んだ。生まれてから何一つ悪いことをしなかった奴でさえ、分け隔て無く何の意味も無く死んでいったんだ」

力が欲しい、と思った。相手に殺される前に殺すことが出来る力をだ。

それは自分を酷使する厳しい鍛錬の中でこそ得られるものだ。机に座って得られるものなんかでは、絶対にない。

「じゃあ行かないのか」

答える代わりに制服の箱を持って、足踏み式のダストボックスを踏み開け、手首を返す。自由落下の軌道を取った制服は、ダストボックスの中に吸い込まれていった。

「行くもんかよ」

半分だけ振り返ると、お節介な少女を睨む。
「赤目のくせに俺の生き方に口を出すんじゃねぇよ」
蓮太郎は自分を指差し、次に延珠を指差す。
「俺の目的は、ガストレアの殺戮。お前の目的は浸食抑制剤。それだけだ」
無言でこちらを睨む延珠に、冷笑を浴びせる。
「皮肉だな。俺は自分の人生を生きているのに、お前は浸食抑制剤を手に入れるために、他人に使われる人生なんだからな」
「復讐の人生が、自分の人生を生きていることになるのか？」
「なに」
「死者に縛られ、死者に拘泥している。それは死者に使われている、ということではないのか」
胸を貫く言葉に、しばし言葉を失う。
真っ赤な激情が体を支配したと思った時には咄嗟に腕で食器をちゃぶ台の上から払っていた。けたたましい音を立てて、食器が割れ、スープが、うどんが畳にぶちまけられる。
蓮太郎は肩で息をして、延珠はそれを無感情に見下ろしていた。
眼をつぶって心を落ち着ける。やがて踵を返す。
「もういい、寝ろ」

言うが早いか、蓮太郎は横になって、電灯を勝手に消す。
心の中では怒りが暴風の嵐となって吹き荒れていた。
ふざけやがって。
ガストレアのくせに知った風な口を利きやがって。

翌朝、蓮太郎は朝一で警察署に寄って、できたてほやほやの拳銃携帯許可証(コンシールドライセンス)機能がついた民警許可証(ライセンス)を受け取った。
携帯電話で近場の銃砲店(ガンショップ)を地図検索。すると、意外なほどの数が地図上に現れる。
これは、ガストレア大戦を経て東京エリア民の危機意識が高まったことも無関係ではあるまい。
大きく息を吸い、吐く。
木更が本格的に民警の立ち上げを行った以上、自分もそれに応えるために用意だけは抜かりなくしておくことに決めていた。
とりあえずは銃だ。出来ることならば今日中に決めておきたい。
問題は蓮太郎が銃器の知識に疎(うと)いことだった。
民警ライセンス取得に際して、民警の訓練所で貸し与えられた銃器の扱いはある程度学んで

いたが、残念ながらお勧めの銃や各種銃の性能などは教えてもらっていない。

近場から虱潰しに当たって、わからないことはわかる奴――つまり店主辺りを質問攻めにした方が効率的だろうと決めると、足を動かす。

地図アプリを頼りに目抜き通りの一本裏手の通りに行った裏通りの一画に、それはあった。

店舗としては大きなものではない。純和風の瓦屋根の造りは古色蒼然とした佇まいを見せていて、この手のニッチ産業にありがちな敷居の高さは感じない。

暖簾をくぐって店主らしき角張った顔の男を捕まえる。柔和な笑顔での応対。話せそうな雰囲気に期待する。

「はい、どのような銃がご入り用ですか？」

「今日買って、すぐ持って帰ることが出来るものってあるか？」

店長の笑顔が強張り、苦笑気味に眉尻が下がる。

「うーん、申し訳ありません。フルオート機構のついた銃以外は誰でも購入可能ですが、申請書を書いていただいた上で、お引き取りできるのは三〜四日営業日ほどかかります」

しまったと思って慌てて懐を漁って民警ライセンスを見せると、一転、店主の表情が安堵にほころぶ。

「ああ、民警ライセンス所持者だったのですね。なら、購入できる銃に制限はありませんし、どの銃でもその場でお持ち帰りいただいて問題ありません」

蓮太郎は胸を撫で下ろした。

一般人が今日中に銃が欲しいという場合、激情に駆られて射殺したい相手がいるなどの場合が往々にしてある。

店主の笑みが強張ったのは、蓮太郎をその手の客だと警戒した証拠だろう。我が事ながらなんという迂闊(うかつ)さか。

「銃種は何にします？　散弾銃(ショットガン)、短機関銃(サブマシンガン)や突撃銃(アサルトライフル)なんかが人気ですが」

「俺は拳法家の端くれだから、咄嗟の時に動きを妨げないものがいい」

「じゃあ拳銃(ハンドガン)ですかね。ご予算はどれくらいになりますか？」

伏し目がちにそっと指を二本立てる。

店主は渋い表情をしたので、やっぱりちょっと足らなかったかと思って恐る恐る近場のショーケースに行って値札を見て——そこで仰天した。

さすがにマシンガンやアサルトライフルなどの大物は買えまいと思っていたが、まさかハンドガンだけでこんなにするとは。

「手持ちの金で買える銃ってないのか」

「なくはありませんが、そうなると品質の悪い使い捨てクラスの銃になります。民警になられるならば、命を預ける武器は最低限の品質をクリアしておかないと」

蓮太郎は手をこまねく。

「俺は拳銃も銃弾も好きじゃねぇんだよ。引き金を引いて弾が出ればそれでいい」
「うーん、そうはいってもですね、お客さん」
しばらく粘ってみたが、脈がなさそうなので退散することにした。
まだ銃砲店はいくらでもあると思って次の店に行ったのだが、二店目でも三店目でも判で押したように同じ対応だった。
どうやら銃砲店の店主はモラリストが多いらしい。
彼らは口を揃えて言う。「命を預けるものには金をかけろ」
最初蓮太郎はおためごかし——つまり、高い銃を売りつけて利益を得たいという裏の思惑を疑ったが、どうも彼らの反応を見ていると純粋な善意で言ってくれているらしい。
たしかに蓮太郎は、表面的にはガストレアと戦う正義の味方だし、自分の店が売った安銃の不発で命を落としたと知ったら寝覚めが悪いどころの話ではないだろう。
そのプロフェッショナル精神には頭が下がるが、生憎、一刻も早く戦闘準備を整えたいこちらには都合が悪いことこの上ない。
蓮太郎は戦法を変えることにした。
スマホ経由でホームページまでアクセスして、なるべく流行ってなさそうな外観の建物を絞り込み、そこを目指す。
経営が苦しい銃砲店ほど、とりあえずなんでもいいから商品を売って利益に還元したがる傾

向がなくもない。
裏を返せばそれは、売りっぱなしになってアフターケアが期待できないということでもあったが、この際目をつぶるしかない。
そこは外周区にほど近いエリアだった。駅から降り立って、地図を頼りに進むと、通りを曲がってどんどんひとけのないところに向かっていく。
周囲には工場が増えていき、晴天下の休日なのに、ひとけがなくなっていく。
やがて立ち現れた民家の一部を改装した銃砲店は看板が小さく、周囲には工業用の団地店が悪いと言うより立地が悪すぎる。
裏を返せば、すべて、自分の求める条件に適合していた。
「なんか御用っすかー」
入店するなり、見るからにやる気のない店員に応対される。
条件を伝えると、いくつか安物の回転拳銃(リボルバー)をガラスケースから出して手渡してくれる。
「自動拳銃(オートマチック)はないのか?」
店員は困惑して頭髪を掻いていたが、しばらくして何か思い当たったのか、暖簾の向こうに引っ込むと、やがて片手に黒っぽい銃を持って現れる。
その銃を見た瞬間、脊髄に電流が走った。
流行のポリマー製の軽量フレームに短めの遊底(スライド)。撃鉄(ハンマー)は見当たらないので、おそらくストラ

イカーと呼ばれる部品が直接薬莢（やっきょう）底部を打撃する方式なのだろう。最近の銃のトレンドだと聞いたことがある。

「スプリングフィールド社製のＸＤ拳銃、四〇口径。弾は十二発入るみたいです」

「四〇口径？」

「知らないんすか？『40S&W（スミス&ウェッソン）弾』。九ミリじゃパンチが弱くて、四五口径だと反動がキツ過ぎるっていうんで開発された、九ミリ以上の威力と四五口径以下の反動の次世代カートリッジっていう触れ込みです。これならガストレア討伐だって余裕っすよ」

次世代カートリッジ、という単語に心躍るものがないでもなかった。

持たせてもらうと、滑り止め加工のしてあるフレームはザラザラとしている。樹脂部品を使っており、そこそこ軽量だ。

重量と射撃反動は常に二律背反（トレードオフ）の関係にある。重量を増やせば射撃反動が小さくなるが携行に向かない。重量を軽くすれば今度は射撃反動が大きくなる。

ガストレア戦を戦い抜こうと思うなら、低反動で素早く狙いをつけて連射できる性能が欲しい。

悩ましいところだったが、蓮太郎はこの重量を良しとした。

そこで、若干外装に痛みがあることに気付く。

「中古品（ワンオーナー）なのか？」

「ええ、それがちょっと曰く付きで」
店員はわずかに言いよどんでから続ける。
「元の持ち主も民警だったんすけど、とある理由で手放しちまったそうです」
「とある理由？」
「相棒のイニシエーターの体内浸食率が臨界点を突破して、ガストレア化する際に、介錯に使ったそうです」
「…………」
母体内でガストレアウィルスに感染したまま出生した嬰児『呪われた子供たち』は、一般人と比べるとウィルス浸食率が非常に緩やかで、ガストレアの持つ超人的な再生能力と膂力を受け継いでいる。
だが、感染者であることは変わらず、微々たる速度で体内浸食率が上がっていき、最後にはガストレア化する。
ガストレアを駆除殲滅することを生業とする民間警備会社がガストレアを生み出すのは本末転倒である。
イニシエーターの介錯は民警の戦術マニュアルにも載っている歴としたプロモーターの職務の一つである。この銃の前オーナーの彼ないしは彼女は、己の職責を全うしたのだ。
「持ち主の民警はいまは？」

「辞めたそうっす」

蓮太郎は掌の上に乗った呪いの銃を見た。

しばらくして冷酷にかぶりを振る。馬鹿な奴だ。イニシエーターに心を移すからそうなるんだ。

蓮太郎は店員の方を向いた。

「撃ってみたいんだけど、いいか？」

耳をつんざく轟音（ごうおん）と共に腕を蹴る反動が手首から肘に駆け抜ける。

鋭い反動に驚きながらも、不快なほどではない。そのまま連続で引き金を引く。最後の一発を撃ちつくし、遊底がロックされる。

銃口からは硝煙（しょうえん）が立ち上り、鼻孔（びこう）に火薬臭を残す。

室内射撃場（シューティングレンジ）に反響する銃撃音の残滓（ざんし）を耳に聞きながら蓮太郎はイヤープロテクターを外し、パーティションで仕切られた個室脇のボタンを押す。

すると、ウィン、という機械音を立てながら地下室正面奥にあるレーンを通って人型のターゲットがこちらにくる。

アイウェアを外しながら、ターゲットに目を凝らす。

思わず、お、と声を上げていた。

射撃用のペーパーターゲットの着弾位置は全体的に真ん中に寄っており、自分でも驚くくらいに精度が良かった。

一般的に拳銃の銃身（バレル）が長いほど弾道の直進安定性が高い――つまり的の中央に当たりやすい。

一般的なフルサイズの拳銃の銃身は五インチに対して蓮太郎のＸＤは四インチ。スペックの上では、むしろもっとハズしてしかるべきである。

射撃場に来るまでに簡単にスマートフォンでＸＤ拳銃の来歴は調べた。元々がかなり安い値段で売り買いされており、『そこそこ当たる銃』という評価を受けているが、決して命中精度をウリに出来る銃ではない。

なのにこれだけ当たると言うことは、元のオーナーが各所をカスタムして精度を上げているのか、よほど銃との相性が良いかのどちらかだろう。

どちらにしろ、購入しない理由はなくなっていた。

購入の意思を告げると、店員はニカッと人好きしそうな顔で笑って、出自が出自ということで売れずに困っていたといって、おまけにバラニウム弾を二セットつけてくれる。

ホルスターが買えなかったのが痛いが、ベルトとズボンの間に突っ込んでおけば事足りる。

店を出る際、最後にもう一度、蓮太郎は銃を天にかざす。

――これからよろしく頼むぜ、相棒。

陽光を吸い込む無愛想な凶器は、無言の首肯を返した。

事務所に帰ってきて、蓮太郎は息を呑んだ。

部屋が広くなった――そう錯覚するほど片付いている。

なにに使うのかも定かでもない積み上げたダンボール箱はなくなり、麻雀卓は撤去され、その代わりに机と椅子が二つ。

足下に堆積（たいせき）していた得体の知れない汚れは除去され、床が見える。

応接セットっぽいソファとガラステーブルまであった。

除去しきれないタバコのにおいだけが、フロアを一階分間違えたわけではないと告げていた。

「フッフッフ、驚いたようね」

無人のはずの事務所に突如聞き覚えのある声が響く。

声の方を見ると、ひときわ大きい黒檀材（こくたんざい）の机に、エグゼクティブチェアが設けられていた。

椅子がくるりと半回転すると、肘掛けに肘をもたせかけて、足を組んで不敵な笑顔を浮かべているお嬢様が現れる。

「ようこそ天童民間警備会社へ」

「どうしたんだよ木更さん、この調度品（ちょうどひん）はよ」

木更はよくぞ聞いてくれましたとばかりに笑みこぼれる。
「上の階のヤクザの事務所からブンドってきたの。ま、迷惑料みたいなものよね」
蓮太郎があずかり知らぬ間に、ヤクザと木更の力関係は決してしまっていたらしい。
哀れなヤクザは骨まで木更にしゃぶられることだろう。弱肉強食が世の習いとはいえ、彼らは喧嘩を売る相手を間違ったなと思う。
「で、木更さん、何の用で呼んだんだよ」
なぜか木更は腕組みすると、頬袋を膨らませてプイッとそっぽを向く。
「お、おい……どうしたんだ木更さん」
左側から回りながら言うと、今度は再び反対側にそっぽを向く。
と、木更の人差し指が黒檀の机——正確には三角プレートをコンコンと叩いている。
プレートには『天童民間警備会社　社長』と書かれていた。
しばらく何を意味するのかわからずポカン、とする。もしやと思って、おそるおそる顔を覗き込む。
「えーと、しゃ、社長………？」
「もう一回言って」
「社長」
「オホン、なにかしら、里見くん」

「……………」

「ウフフ、一回呼ばれてみたかったのよね」

木更が拳を固めながらウキウキと上下させる。

子供か、と思って呆れかえりかけるが、ふと、木更の心の底から嬉しそうな横顔を盗み見て、まあいいか、と思ってしまう。惚れた弱みというのは、あばたもえくぼに見えてしまうからどうしようもない。

「まさか社長ごっこがやりたくて会社を興したんじゃないだろうな」

精一杯の皮肉に、木更は楽しそうな表情で顎をあげる。

「あら、違うわよ」

そう言って脇に置いてあった書類束を、こちらに向けて投げだし、その上に手を置く。

「事件を追うわよ、里見くん」

「ガストレア事件か？」

「まだはっきりとしたことはわからないんだけど、最近不審な事件が起こってるの」

木更の細く美しい手が一枚ページをめくるぱらりという優しい音。

軽く目を通してみると、それは地下下水道にガストレアが住み着いているという噂だった。

ある場所では、下水管の近くに繋いでいた犬が血痕を残して消えた事件。それが下水管に繋がる場所

別の場所では、飼い猫や飼い犬が近づこうとしない場所がある。

だという。

また別の場所では、母親が生後三ヶ月の赤子を連れて地下鉄に乗ろうとした時に、一瞬お手洗いに入って戻ってきたときにはベビーカーの中の赤子は消えていた、という事件。

犯人グループからの身代金などの要求はなし。赤子はいまだ行方不明。

見ていて胸くそが悪くなる事件が続く。

蓮太郎は書類から顔を上げる。

「これがガストレア事件だっていうのかよ?」

「私はその可能性が高いと思ってるの」

これは普通なら、別個の事件として扱われる問題である。

もしペットの殺害なら器物破損だし、赤子の誘拐なら未成年者略取及び誘拐罪である。勿論

これらの罪状が成立するのは、犯行に人間が絡んでいればの話だ。

「ガストレアは通常人間を優先的に襲うし、襲うにしたって、襲った対象を捕食する場合と、ガストレアウィルスを体内に注入してガストレア化させる場合の両方のパターンがあるよな?この三つの事件がガストレアの仕業だとして、現場だけ見ると、ガストレアに誘拐されたようにしか見えないぜ」

「もしくは殺されて引きずり込まれていったとか、ね」

木更の冷酷な言葉に背筋がぞっとする。

「まさか。木更さん、さすがにちょっと想像力をたくましくしすぎじゃねーのか」

「まあ、誰も姿を見たわけじゃないから、たしかに机上の空論って言われても仕方が無いけどね」

「……木更さん、確認なんだけどよ。俺たちは他人に不幸が起こって欲しいわけじゃないんだよな」

木更は肩肘を突いた手に顎を乗せながら、毒々しい微笑を浮かべる。

「勿論よ。いたずらに犠牲者が出て欲しいなんて一度も思ったことはないわ。でも私たちがガストレアを殺して復讐を果たすためにも、ガストレア事件は起こってもらわなければ困るの」

「業が深い稼業に就いちまったんだな、俺たちは」

「多分天国には入国拒否されるわね」

「俺たちはいま、幸せなんだよな？」

「何が言いたいの」

「赤子の死体は見たくない」

「ガストレア化してれば見ることもないわ」

木更は乾いた笑いを漏らす。蓮太郎はさすがに笑えなかった。

突如、静寂の事務所内に鋭い電子音が鳴り、蓮太郎と木更の体が強張る。

これは、ガストレア出現のアラート。

木更はスカートのポケットから携帯電話を取り出して電子音を止めると、画面を覗き込む。

「周囲の民警に招集が掛かったわ。場所は勾田市の地下鉄。どうやら悪い方向に予想が当たったみたいね」

まさか民警としての初戦がこんなに早く訪れようとは。

だが脳内では何度となくこの日の状況をシミュレーションしていた。

蓮太郎は急いで戦いの支度を整える。

といっても、用意するものなどほんの少ししかなかった。

まず、先だって手に入れた銃と弾。もう一つは、これまた先だって手に入れたイニシエーター。

引き金を動かしただけで我が意を汲んで敵を倒す凶器と比べると、目立った意思こそ示さないものの、蓮太郎の思惑（おもわく）の埒外（らちがい）で考え行動する道具というものは甚（はなは）だ扱い辛かった。

いままた、待ち合わせ場所に刻限通りに現れた少女に対して、なんと声を掛けて良いものか一瞬戸惑う。

「おい」

さして楽しそうでもなくカバを模したバネ仕掛けの遊具にまたがっていた少女は、こちらの

姿を認めると、わずかに表情を険しくする。
「行くぞ」
そちらも見ずに踵を返すと、背後で彼女が遊具から飛び降りて後ろをついてくるぺたぺたという足音が聞こえる。
わずかに周囲に首を巡らせた瞬間、ピュオッ、という空っ風が首筋を撫でていき、思わず首をすくめる。
勾田駅周辺に建設された公園には延珠の他に遊ぶ子供の姿もなく、それどころか駅そのものに人影が見えない。
それもそのはず、地下鉄でのガストレア発生の報を受けて、駅周辺には避難警報が出ている。この日のために訓練されている警察と自衛隊の行動は早かった。連携して周囲の人間を退避させて、周辺区域を封鎖。いま勾田地下鉄周辺は束の間のゴーストタウンと化している。
駅入り口に行くと、警官ふたり組がこちらを見て走り寄ってきた。
「おい、警報を聞いてないのか？　一般人は避難して——」
言い終わらない内にパスケースを放り投げると、怪訝な表情をして受け取った警官の瞳が見開かれ、何度も写真と蓮太郎の顔を往復する。
「民警？　お前みたいな子供が」
予想できた反応なので、蓮太郎はあえて義務的に敬礼する。

「状況は」

警官はしばらく口をもごもごさせていたが、やがてこちらを真っ直ぐ見て頷く。

「歩きながら話そう」

並んで地下鉄の階段を降りていくと、地表を吹きすさぶ寒風に比して、随分温かいことに気付く。

警官はメモに目を落とし、それを読み上げていく。

「十四時五十二分発の外周区三十九区行きの地下鉄が突如脱線。車掌がガストレアが現れたとの報告を最後に交信が途絶えた。ほとんどの乗客はドアをこじ開けて自力で逃げ出せたんだが、彼らの話だと逃げ遅れた乗客がまだ数人車内に取り残されている」

「ガストレアは一匹じゃないのか？」

警官はメモから顔を上げる。

「群れで行動するタイプのガストレアみたいだ」

「なんの因子（いんし）のガストレアなんだ」

「暗闇の中から襲ってきたんで確かな情報ではないんだが……」

そのあとに続く言葉を聞いて、蓮太郎は大きく頷いた。

「単因子（ステージI）か？」

「おそらく」

緊張を紛らわすために拳を握ったり開いたりする。
初戦の相手としては上々。人命がかかっている以上選り好みは出来ないのだが、ステージⅡ以上が来たら、結成したてのペアにとってかなりの試練になっていただろう。
駅改札の窓口と、直結する地下街のシャッターは降りていて、列車運行状況を示す電光掲示板は真っ赤な文字で『勾田駅と西勾田駅区間にて電車の横転事故があり、現在復旧作業中』とある。
人影はない。
さらに地下、ホーム側に降りていき、西勾田駅方面のトンネルを睨むが、漆黒の闇が口を開けている。
奥手から流れ込んでくる生暖かくねっとりと肌に絡みつく空気は、まるでこちらを差し招いているかのようだった。
と、『こちら多田島(ただしま)だ、おい、応答しろ!』とノイズ混じりの胴間声(どうまごえ)が聞こえて、横手の警官が飛び上がりそうになって胸元に刺さった無線を取る。
「警部ですかッ! ……ええ、はい」
どうやら現場の責任者かららしい。直立不動の姿勢を取る。しばらく何事か交信して、こちらを振り返った。
「たったいま西勾田駅にも応援の民警が到着した。勾田駅と西勾田駅の双方の地下鉄線路から

等民警には一体の討ち漏らしなくガストレアを撃滅して欲しい。出来るか？」

そのための俺たちだと思って拳銃を腰から抜くと、返事の代わりにスライドを引いてXDの薬室に初弾を装填する。

「お前も聞いてたか？」

蓮太郎は振り返りながら警官の話を背後に流すと、延珠は一つ頷いていた。

と、黒かった彼女の瞳がぼんやりと薄赤く輝き出す。彼女が体内に潜伏させているガストレア因子を発現させたのだ。

右腕と右足の付け根の辺りがムズムズする。

事前に知識としては知っていたが、いざ本物を見ると、こみ上げてくる嫌悪感を飲み下すとは、尋常ではない意志力を必要とした。

『呪われた子供たち』の『呪われ』たる所以。彼女が決して一般人たり得ない異端の発露だった。

何よりおぞましいのは、こうして馬脚を現すまで彼女は善良な可愛らしい少女にしか見えないということだった。

――化け物め。

すんでの所で、口から漏れそうになる悪態を飲み込んだ。

もっとも、口で言わなくとも視線だけで言わんとするところは伝わっているらしい。
延珠は敵意と軽蔑に冷え切った瞳でこちらを一瞥（いちべつ）すると、人間らしからぬ跳躍力で線路にジャンプする。
その後を追って線路側に飛び降りると、ザッと敷き詰められた荒い小石をブーツの裏で感じる。
「じゃあ、行ってくる」
「これを使え」
警官が投げてくれたものを咄嗟（とっさ）にキャッチすると、マグライトだった。
「助かる」
「気をつけろよ」
頷きを交わし合い、正面のトンネルに視線を戻す。
蓮太郎と延珠は闇の中に一歩足を踏み出した。

地下トンネルは真っ暗闇で一寸先も見通せない――などということはなく、マイルストーン代わりに一定間隔ごとに足下に強力な蛍光パネルが光っているので、かなり遠方まで視認が可能だった。

高さは一〇メートル以上。幅も二〇メートルに迫るだろうか。
息苦しいなどということは一切なく、むしろ幅にはかなり余裕がある。
癪なのは、トンネルの全体が右側に傾斜しているので、奥まで見通せないことだった。
見晴らしのいい直線距離は本来銃器の独壇場なのだが、この傾斜のせいで視認可能距離も落ちて引き金を引くタイミングもワンテンポ遅れるのは必至だった。
静寂のトンネルには、蓮太郎たちがたてる靴音以外の音は何も聞こえない。
教えたわけでもないのに、延珠は蓮太郎の前を歩いている。
バックアタックを警戒しなくてもいいミッションなので、イニシエーターが先行しているのだ。
普通ならば、女性を守って先行するのは男の仕事と言えるし、相手が女児ならばなおさらなのだが、それはイニシエーターとプロモーターの戦法においては当てはまらない。
プロモーターが後衛なのには三つ理由がある。
まず、イニシエーターはガストレアの驚異的な治癒力を受け継いでいるので、対ガストレア戦では頭と心臓の破壊さえ気をつければ、他の部位破壊は神経質にならずとも良いということ。
もう一つは、プロモーターは後衛であるということ以上に、司令塔としての役割もあるので、比較的安全な場所から指示を出せる方が望ましい。
三つ目、これが一番大事なことだが、彼女たちは半分ガストレアなので本来的に信頼が置け

ない。妙な真似をしたら即射殺することが出来る位置取りを常に確保しておくのは、プロモーターの精神の安定のためにも非常に重要なことだった。

「なあ、トンネルはどれくらいあるんだ」

先行する延珠が、振り返りもせず問うてくる。

一瞬無視しようかとも思ったが、仕事の成否に関わることだ、と自分に言い聞かせて、抑揚を殺した声で答える。

「たしか勾田駅と西勾田駅の間は五キロ弱。西勾田からも民警が出発してるってことだから、遅くとも二・五キロ地点ではぶつかる。だが、多分その前にどっちかが電車を見つけるだろうから、実際の戦闘開始距離はもっと短いぞ」

「了解だ」

冷淡に答える延珠の声がわずかに洞内に反響するのを聞きながら、蓮太郎は補足する。

「もう一つ、多分トンネルみたいな場所では俺の銃の発砲音は覿面に反響する。かなりでかい音がするから竦んだりするなよ。あと、発砲時には絶対にこっちを見るな。暗闇だと銃口炎が目に残像になって焼き付くから戦闘の障害になりやすい」

「つまり戦闘が始まったらお前の方は見るなということか？　願い下げだ」

「……どういう意味だ」

延珠は立ち止まると、こちらを振り返った。峻烈な赤い瞳がこちらを射貫く。

「私がガストレアよりも信頼できないのは、お前だ」
蓮太郎は声に出さずに感心していた。
——なるほど、誰が本当に危険なのか、一応は理解してるってわけか。
やにわに険悪なムードになりかけたそのとき、キィキィ、と鳴く声が蓮太郎と延珠を呪縛させた。
ほぼ同時に近場の壁に背をつけ、少しずつ湾曲した壁面の向こう側を見る。
そして息を呑む。
最初に見えたのは、トンネル側壁に出来た大穴だった。外側からコンクリが破られており、足下には瓦礫となって散乱している。
ここから地下鉄内にガストレアが侵入したのだろう。
と、風に乗って鼻が曲がるようなにおいが漂ってきた。近い。
顔を曲がり角から覗かせて、慌てて顔を引っ込める。
蓮太郎はXD拳銃の銃把を祈るように持って、引き金に指を掛ける。
一瞬見えたもの、それは無数の赤く光る目だった。
本来種子を噛み砕くために発達した大きな前歯。地下生活によく適応したのか、幅広の頭で、目と耳は小さい。
細長い胴体の背部は灰色がかった茶色、腹部はくすんだ白色をしている。

長い尾にはほとんど毛が生えておらず、足には頑丈な鉤爪があり、シャベルのような前肢の鉤爪のほうが長い。
あれでトンネルを掘って移動することも出来るのだろう。
モデル・ラット。ネズミのガストレアだ。歯がゆいことに遠すぎて、種類までは同定できない。
——しかし、なんつーデカさだ。
齧歯類最大と目されるカピバラよりさらに大きく、一体一体の大きさがイノシシほどもある。普通あれほどの大きさだと筋組織のバランスや皮膚呼吸などに問題が生じてくるものだが、一瞬見たガストレアに、そんな危うさは微塵も感じない。
これがガストレアウィルスが成し得る奇跡のような不条理だ。勿論人類にしてみれば悪夢に他ならない。
数は概算で十体前後。横転した列車も見えた。ここからでは生存者の有無は不明だが、いたるところにネズミが入り込んでいるので、予断を許さない状況であることに変わりは無い。
蓮太郎は嫌悪を押し殺しながら傍らの相棒に向かって顔を近づける。
「俺が先にライトで暴き出しながら銃撃して混乱を作り出す。そこに突っ込んでお前が各個撃破しろ。向こう側のトンネルに逃げたガストレアは深追いするな」
「トンネルの反対側から来る民警は待たなくて良いのか？」

「時間が無い。あっちに逃げたガストレアだけ任せればいい」

キモはやはりイニシエーターとの連携だ。自分たちの連携がキチンと機能すればガストレアが死に、それが出来なければ自分たちが死ぬ。ごくごく単純な力の理論。

だが、そこで何を思ったのか、延珠は伏せがちだった顔を上げる。

「言っただろう？　お前に背中は預けられない。私がすべてのガストレアを叩けばいいんだ」

怒気はゆっくり、静かに体に満ちていった。

「ダメだ」

「お前はここで見ていろ」

延珠が踵を返し、影から顔を出し飛び出す機会をうかがう。

「待て！」

その背に手を伸ばすが、わずかにとどかない。

風になびくその後ろ髪に触れることすらままならず、延珠の姿は一瞬で掻き消えた。否、貧弱な人間の眼球と脳の処理速度では捉えきれないほど延珠の動きが素早かったのだ。

延珠はすでに猛ダッシュと大ジャンプを果たし、敵中央めがけて躍りかかる。

ネズミたちは一斉に顔を上げるが、上空から髪を振り乱しながら降り注ぐ延珠に対応するには遅すぎた。

自重に圧倒的な脚力をプラスアルファして隕石よろしく落下。地面が大きく陥没し、延珠の

もたらした破滅の爆心地周辺にいたネズミは、何が起こったのかもわからずトンネル天井に叩き付けられ、圧死する。

態勢を立て直す前に電光石火の速度で肉薄した延珠の蹴りが近場のガストレアの体を粉砕し、血霧が撒き散らされる。

「うあああああああああ！」

慟哭にも似た叫びを漏らしながら、延珠は近場の敵を左右に吹き飛ばし、蹴り足が顎を打ち砕く。

蓮太郎は歯噛みする。

司令塔の指令を聞かずに暴走するイニシエーター。冗談にしてもタチが悪すぎる。

だが、状況が動き出してしまった以上贅沢に迷っている時間は無く、蓮太郎も壁から飛び出す。

マグライトと銃を交差して持ち、奥側を照らしながら引き金を引き切る。空中に踊る薬莢。

轟音と共にガストレアの体を跳ねる。そのまま三回連続で引き金を引くと、一発が脳に当たって頭蓋が破裂。ガストレアの体が倒れるより前に、次の標的に照準して、引き金を引いていた。

場に狂乱がぶちまけられる。

策もなにもない突貫は、皮肉にも完全に奇襲としての成功を収めていた。

五体、六体と数秒おきに一体のネズミが粉砕される事態にいたって、ガストレア側の意気を

完全にくじく。

奥手側に遁走するネズミは無視する。問題は——

「邪魔だ！　どけ！」

縦横無尽に動き回って敵を屠っていく延珠は、たしかに個の戦力としては突出しているが、蓮太郎の射界に頻繁に入り込むため、トリガーチャンスを何度となく見送らざるを得なくなる。

そうこうしているうちに、二匹が延珠の脇をすり抜けてこちらに突進してくる。

もはやイノシシも同様の突進エネルギーは、体当たりされただけで内臓が破裂するだろう。

足を狙って発砲、一体は体勢を崩してコンクリを割りながら転倒。そのまま頭部に二発。抜かりなく生命を狩り取る。

と、XDが弾切れ。

弾倉交換の間もなく敵は眼前に迫っていた。

左にフェイントを掛けながら右に横っ飛び。

交差しざま、XDを鈍器代わりにネズミの足に振り下ろす。前足を痛撃されたネズミは転倒しかけるも、あわやというところで体勢を立て直し、そのまま逃げ去ろうとする。

——逃がすものか！

膝立ちになり、空の弾倉を捨てながら、空いた手でポーチに吊ったフルロードマガジンをたたき込み、スライドストップをリリースして再装填。

照準、発砲。

こちらに背を見せていたネズミは今度こそ転倒。蓮太郎は照準したまま立ち上がり、近づきながら五回引き金を引く。

後ろ肢で何度も土を掻きながら立ち上がろうとするネズミの体をズタボロにし、内一発が心臓を破壊。壁面を画布（がふ）代わりに血液の芸術がぶちまけられる。

XDを持つ手が武者震いに勇み立つ。

バラニウム弾はガストレアの再生阻害効果がある――知識としては当然知っていたが、人類を絶滅の瀬戸際まで追い詰めていたガストレアに一矢報いることが出来たのだ。

ようやくだ。ようやく、ガストレアと戦える。

「う……ぐあ！」

少女の悲鳴に振り返り、ハッとした。

敵ガストレアはすでに残り一体までに数を減じていたが、敵中にただひとり飛び込んだ延珠も無理がたたったのだろう。要（かなめ）とも言える右足は歯形が付いて異様な形にへこんでおり、外側に曲がっている。

ゆっくりと再生を始めていたが、問題は食いつかれている腹の方だ。

「ぐぅ……うぅぅぅぅ！」

ミシミシと音を上げ、延珠の骨が押し潰されていく。顔を横にして延珠の胴体を左右にクラ

ンプしているネズミの大顎は、いまこの瞬間も、少女の細い体を背骨ごとへし折ろうとしている。

延珠の体は宙に吊り上げられており、残った左足で懸命にネズミの大顎に蹴りをたたき込むが、もとより踏みしめられる地面がなければ蹴りの威力は半減以下になる。蹴り離せる道理はない。

ＸＤを構えたが、そこで銃口が震える。

延珠が邪魔でガストレアに照準しにくい。

ガストレアの胴体なら問題なく狙えるが、おそらくそれでは意味が無い。着弾のショックで筋肉が収縮して延珠の体が噛み砕かれる恐れがある。

狙うなら、瞬間的に相手の運動ニューロンの指令を断ち切れる延髄もしくは脳幹。

だが、蓮太郎が銃を構えたまま円を描くかの如く射撃位置を変えると、ガストレアも延珠を盾に体の向きを変えて、常に頭部を守る軌道を取る。

蓮太郎は愕然(がくぜん)とする。こいつ、知能があるのか？

だとしたら『ガストレアには知能は存在せず、ただ生得的な本能によって行動する下等生物である』という民警マニュアルの記述は一体……。

藍原延珠を藍原延珠たらしめている骨格がゆがみ、背骨が破断(はだん)の予兆を見せ、嫌な軋(きし)みを立てる。

「延珠——おい、藍原延珠」
蓮太郎は初めて、彼女の名前を呼んだことに気付いた。
玉の汗を浮かべながら延珠がこちらを振り返る。
「な、なんだ」
「俺を恨め」
静かに引き金を絞った。
轟音と同時に反動で銃口が飛び跳ね、黄金色の空薬莢が宙を舞う。
ネズミの頭部でバラニウム弾が弾けた。延珠の体を貫通しながら。
延珠が喀血する。
ガストレアの頭部が左右に揺れ、その瞳が揃って天を向くと、糸が切れたようにくずおれる。
同時に延珠の体も落下。
蓮太郎は慎重に周囲を見渡しながら、ガストレアがいなくなったことを確認すると、銃をベルトに挟んで延珠に歩み寄る。
ガストレアに噛み砕かれた足と腹の傷は再生の兆しを見せていたが、プロモーターに撃たれた脇腹から流れ出す血は止まる見込みもない。
さもありなん。脇腹の銃創はバラニウムによってもたらされたものなのだから。
蓮太郎はほぼ真上から大の字になっている延珠を見下ろす。

「お前の血も赤いんだな」
冷酷な感想に、延珠は冷たいコンクリの上で身をよじりながら涙を流し始めた。
「痛い……痛いよぉ……ひ……ぐぅ」
それが感情の真似事だということは知っていた。
だってガストレアは泣かない。こいつはガストレアだ。
──そう理解していたのに、蓮太郎の視線は一瞬激しく泳いだ。
里見蓮太郎は銃を撃って吹き飛ばした。ガストレアではなくイニシエーターとの信頼をきつく目をつぶって首を振る。ポケットから携帯電話を取り出す。
電波はギリギリだった。途切れ途切れの通話の中、警察に電話して事件は解決したことを伝え、救急車を手配してもらう。
しばらくして鉄道警察らしき人間が、担架(たんか)を持ってきて、延珠を乗せて運んでいく。
鉄道警察からは、もうすぐ到着する警察の現場検証のために残ってくれと言われる。
彼らが消えたあと、一人、ネズミの死体ばかりの静寂の空間に取り残された。
ふと、延珠の両親はどうしたのだろうと思った。九歳の子にとって、両親は世界のすべてのはずなのに。
次の瞬間、寒気に二の腕を擦っていた。
懐を漁り、携帯電話を操作。救いを求めるように保存された民警マニュアルを呼び出す。

そこに書かれた文言を何度となく目で追う。

『イニシエーターは将来的なガストレア予備軍であり、ガストレアとの戦いによって消費していく消耗品である。決して心を移してはならない。彼女たちについて想像してはならない』

「そうだ。人間の真似事をしやがって！」

蓮太郎は天を仰ぎ、大きく息を吐く。

——あんなに弱いようじゃダメだ。ガストレアを殲滅させるのには、もっともっと強いイニシエーターでなければ。

「早く、替わりを探さないと」

蓮太郎は一人、ネズミの死体ばかりの静寂の空間で、呪文のように何度もそう口の中で呟いた。

了

特別座談会

TVアニメ『ブラック・ブレット』コンセプトとバックボーン

原作者
神崎紫電
×
監督
小島正幸
×
プロデューサー
小倉充俊

電撃文庫の人気作品としてテレビアニメとなった『ブラック・ブレット』。その誕生から製作の裏側で生まれた化学反応、作品に込められた想いなどについて、キーマンとなる３人に語っていただいた。

ンタビュー・構成／和久津慎

神崎：実は僕、アニメ化の話があるとはうかがっていたんですが、詳細を知らないままOKを出していまして。スタッフさんとの顔合わせまで、まったく知らないところで企画が動いていたという状況なので（笑）、経緯などを聞きたいなあと。

小倉：企画が決定してから神崎さんとお会いするまでのスパンは、実はすごく短かかったんです。

KADOKAWA アスキー・メディアワークスさんに企画を持ち込んだ際には、すでにキネマシトラスさんと組むことを決め込んでいて、その段階で企画書にも名前が入っていました。キネマシトラスさんは作品に対して真摯に取り組んでいただけるスタジオですし、『ブラック・ブレット』は非常に準備期間のかかる作品だろうと考えていたので、早い段階でアニメーションプロデューサーの小笠原（宗紀）さんに相談して一緒に企画を立ち上げていきました。

まずはじめに小島さんに監督をお願いすることが決まって、キャラクターデザインやキャストのオーディションと同時に他のスタッフを固めていって。

でも監督が決まる前に唯一考えていたのは、音楽を鷺巣（詩郎）さんにお願いしたいということですね。小笠原さんと二人で会いに行っていました。

ちょうど神崎先生が原作の4巻を書いていらっしゃる頃ですね。そんな具合に、見ず知らずの人たちが裏でいろいろなことを企んでいました（笑）。

神崎：なるほど、僕が全く知らない事情があったんですね（笑）。小倉さんの中でアニメ化

に向けてのビジョンがしっかり決まっていた印象があるんですが、特に作品のどんな部分が琴線に触れたのか、気になります。

小倉：蓮太郎の真っ直ぐな心根とそれに反して報われない姿が、僕には悲しくもヒロイックに見えたんです。色んな物を助けたり守ったりしたいのに、掬い上げたものが全部、指の隙間から零れ落ちてしまうような不条理な状況で、一歩間違えばダークサイドに落ちてしまっても不思議じゃないのに、心折れずに歩み続けている。

小島：真正面でない、逆説的なヒロイックさだよね。

小倉：『呪われた子供たち』もそうなんですよ。出てくる大人たちはすごくエゴイスティックで私利私欲にまみれていたりするのに、悲劇的な運命の下にいる、まだ10歳くらいの彼女たちのほうが心が強くて、よほど大人なんです。そういう社会の在り方や人間関係のアンバランスさを含めて、とても特殊な作品だなと思ったのが最初のきっかけですね。まず読者として面白かった。そこにモノリスや天の梯子などビジュアル映えしそうな要素もたくさん用意されていたので、これは真剣に映像化したら面白いぞと。

小島：苛酷な世界で、いかに人間として生きていくか。その部分をきちんと描けたら、深い作品になるんじゃないか。僕自身は、それを映像化したいという気持ちが非常に大きかった。原作の持ついろいろな要素が納得できるものだったこともあって、作品のテーマを表現する方法論みたいなものは、読みながら頭の中で考えていました。例えば差別問題についても、原作に書かれていることを自分たちがきちんと受け止めて、描かなくては

けない。ぼかしたりうやむやにしたり、二の足を踏んだら負けだなって。
小倉：色々難しいテーマの織り込まれてる作品ですので、問題があったらそれは公共の決まり事なので当然対応しますが、まず作る時点で表現を狭めるのはやめましょうというのが基本スタンスでしたね。
小島：理想かもしれないけれど、作り手が差別なりなんなりの問題、テーマをどう受け止めて、どう表現したいかが明確になっていれば受け入れてもらえるんじゃないかという、楽観的な考え方もあったんですよね(笑)。そこが唯一の拠り所でもありますから。
小倉：ライトノベルなのにちっともライトじゃない(笑)。でもそういう重いテーマから一切逃げていないのに作品は暗くないんですよね。それは延珠たちの明るさというか、登場人物たちの生命力みたいなものに支えられてるのかもしれないけど、それが人間の憎悪の象徴である黒いバラニウムに囲まれた社会で生きているという対比的な世界観はすごく特徴的で、仮に普通の小説やゲームとか違うカテゴリから出ていても『ブラック・ブレット』という作品は気になったんだと思います。
小島：むしろ神崎さんが『ブラック・ブレット』を書いた経緯が気になります。
神崎：『ブラック・ブレット』は、実は他社で没になった企画なんです。どうしても書きたかったので、作品の形に仕上げて電撃文庫さんに持ち込んだら、現担当の黒崎さんが拾ってくれた。

流行を意識せず自分が気になったものを追求すべし、むしろ逆張りしてやるというひね

くれた考えがあるせいで（笑）、こういう作品になっていますが、あとから考えてみると、1巻は特に映画をモチーフにした要素がバンバン使ってあって、僕をしのぐシネフィル（映画通）である黒崎さんが、そういう部分を拾ってくれたのかなあとも思っています。

小島：でも『ブラック・ブレット』のプロットは、ものすごくオーソドックスですよね。

神崎：その通りです。ほかの作家さん編集さんにも、ガジェットとかは目新しいものを使っているのに、流れは王道だねと言われることが多くて、皆さんすごく慧眼だなあと。「ABCの法則」——当たり前のことを、バカみたいに、ちゃんとやる——を絶対に破らずに、モノリスだったり10歳のヒロインだったりという目新しい要素を加えているんです。

　幼女ヒロインの部分については、視聴者の方々にフィーチャーされているらしくて、大きく目測を外していなかったようで安心しました。

小島：なるほど。僕が飽きていないのは、プロットがしっかりしているからなんだろうな。作っていて、すごく映画的な作品だなと感じているんです。

小倉：作りが映画的だから1エピソード3～4話でまとめやすいんですよ。

神崎：僕の中では、1巻が120分、2巻が100分、3～4巻が140分くらいの映画の尺で考えていたので、最初は18話構成でどうでしょうという、わけのわからない提案もしていたんです。本来、12話のところを、小倉さんがなんとか1話増やしてくださったんですよね。

小倉：企画が動き出してから、原作の第4巻までやりたいという事になったので、3週間

くらいクラクラしながら(笑)、予算やスケジュールなどを調整してました。放送枠の問題とかもあって、ただでさえ逃げ場のない作品の逃げ場をさらに減らすことになるなあと思って……。とはいえ、納得できる話ですからね。

小島：実際、12話で作っていたら、もっと原作のテイストを削ることになっていたはずなので、違った印象の作品になっていた気がします。

神崎：脚本を読んだだけでもわかります。特に1〜4話は、超ベテランの浦畑(達彦)さん(＝シリーズ構成)がいかに歯ぎしりしながら削ったのか、同じく浦畑さん担当の13話がすごく生き生きしているのを見ると、余計に身に沁みます。

小島：原作にある情報量をどこまで拾って、どこまで省くかという選択肢は、絵コンテの段階でもすごく苦労しましたよ。後半戦になればなるほど、絵にするのがすごく難しいですし。特にガストレア対イニシエーターは、個々に戦っている分にはいいですが、グループ戦や多数のガストレアとの戦いを、絵としてどう表現していくか……。それがねー(笑)。

神崎：3〜4巻のエピソードは前半後半で話的に緩急がついていて、アニメ映えしそうなので、後半戦をいかに盛り上げるかに関しては原作者は割と楽観しています。

小倉：映画的な構成の『ブラック・ブレット』だけに、後半戦もすごく盛り上がりますからね。前半とはまた違ったシチュエーションをどう活かしつつ、どう描いていけるのか……。感情が揺さぶられるシーンも満載ですからね。

小島：セリフなし、絵だけで語る部分は、一番映像として見せ場になりますからね。13本

のテレビシリーズとして、すべてが解決するわけではないですが、何かしら希望が残せるラストになるんじゃないかと。

小倉：読者として読み続けたい作品ですし、今後も続く原作には支障がない程度に（笑）。今回のアニメ化を経て作品がどこまでいくのか、原作の今後の展開も気になりますね。

神崎：作品継続を決めるのは完全にマーケットで、そこだけは動かせないのですが（笑）、そういうお気持ちはすごくうれしいです。アニメ化にあたって、気が合う有能な人たちと一緒に仕事ができただけでも、すごくいい経験でしたし。

小島：これまで原作者の方と脚本について話をすることがほとんどなかったので、前向きに一緒にものを作るという意味でも、参加していただいて本当に助かりましたよ。

小倉：作品についてうかがいたいこともたくさんありましたからね。最初はそれこそ、蓮太郎くんがアニメの第4話のラストで聖天子様にしている質問と同じで、「そもそもガストレアってなんなんだよ！」的な感じでしたから。

神崎：ある程度の謎についてはお答えできたんですが、考えてなかった部分もあったので、ぐっと詰まりました（笑）。

小島：世界の真実について出すか出さないかは別として――もちろん出さないんですが（笑）、作っている側がわからないまま進むのは難しいんですよ。答えがないならないなりに作りようがありますし、理解した上で描かないことも選択肢ですから。

小倉：世界観を作るうえで、なければこちらで作ることもできますからね。モノリスはこ

うやって建設されているんじゃないかとか、外周区との隙間にはスラムがあるんじゃないかとか、各パートの人たちが想像力を膨らませたことも大きいと思います。

小島：原作小説と違うところは、出てくるものすべてにビジュアルを与えなくてはいけないところで、作品世界から外れないように作っていくためにも、聞けることは聞こうかなと。

神崎：自分の想像以上のものがどんどん出てくるので、単純にびっくりしました。例えばモノリスも、僕は巨大な万力みたいなものでクランプされた形で想像していたんですが、蜘蛛の巣状の足場の上に建てられていたり、保守点検する人たちがいたり、まったくの想像外で。

小倉：モノリスについては崩壊シーンがあると最初から分かっていたので、再建をどう描くかという部分を検討した影響ですね。ヘリでブロックを積み上げる形で、じゃあ三割くらい出来上がれば磁場の関係でガストレアが入ってこられなくなるんじゃないかとか、そういう議論を積み重ねた結果、いろいろなギミックが生まれていったんです。

小島：モノリスが関東平野に建っていたら、実際にどう見えるのかも検討しました。シミュレーションのためにデータを作ってみたら、見る場所によっては絵にならないこともよくわかって、最終的には見栄えを優先しようという話になったりしましたね。

神崎：わざわざCGで3Dモデルを作ったとうかがった時は、すごくびっくりしましたよ！

小倉：場所によっては、ちょっとした山よりモノリスの方が高くて、その対比がマンガみ

たいな絵面になってしまったり、逆に周囲の山や林に埋もれて見えなくなってしまったりもしますから、最終的には画面上での見栄えでジャッジしています。街中に巨大な黒い構造物があるという異常性は、ビジュアルイメージとして象徴的に活かせるポイントですからね。

小島:ガストレアの造形は(博史)池畠さん(=副監督)が中心になってやってくれました。基本的な在り様はモンスターなんですが、ガストレアウイルスによって異形に変わったものなので、生物の持つ「生きている感」を大事に、形状を含めて生物的な印象にしたかったので、実際にいる不気味な生物をモチーフにしています。

神崎:僕は映像化を念頭に小説を書いていなかったので気になっていたんですが、もっとキャッチーなモンスター的造形のほうが良かったということはないんでしょうか。

小島:キャッチーな部分も必要なので難しいところですが、今回は生物寄りを選択していますそうすることで蓮太郎が生物に造詣が深いことも活きますし、見る側にもわかりやすい。

小倉:どちらも選べるんですよね。仮にモンスター的な造形にするとしても、『キャッチなモンスターとは何ぞや』という問題は残りますし。どちらを選ぶにしろ、モノリスと同様、誰かのセンスに預けることでイメージが膨らんでいる部分はあると思います。そういう意味でも、皆が真剣で真摯というか、誰も楽しようとしてない現場ですよ。

神崎:いいですねその表現。懐の深い監督をはじめ、現場の方々ときちんとコミュニケー

ションが取れているのはありがたいです。
小倉さんとはお互い意識するくらい性格や考え方が似ていて、アフレコに参加できないときは『まあ小倉さんがいれば、僕が言うことは全部言うだろう』と、全部お任せできてしまうくらい。

小倉：シナリオ打ちの時からそうでしたけど、不思議なくらい気になる所が被ってますよね。映画好きな所とか、趣味性も含めて、見てきたものやエンターテイメントに求めているものの感覚が近いんでしょうね。だから『ブラック・ブレット』を映像にする際に欲しい要素がすごく共有できている気がしてます。

小島：じゃあ、小倉さんがプロデューサーじゃなかったら、作品の方向も違ってたのかな？

小倉：僕に限った話じゃなく一般論として、ある程度変わってくると思いますよ。立ち位置が企画の最初の発注って事もあって、監督によって作風が変わるのと同様に、企画へのアプローチ次第でかなり違いは出ますよね。アニメは集団芸能ですから動きだしちゃったら最初の想定とはまた違ってくる事も多いですけど。

例えば残酷表現において、僕は破壊すること自体を見せ場や目的にすることが嫌いで、それじゃ単にスプラッタを見世物にしているだけじゃないかという想いがあって、それと同様に『呪われた子供たち』に対する仕打ちが単純に差別のシーンとして描かれていたらこの作品に興味を持たなかったと思うんですよ。『ブラック・ブレット』の場合、ガストレアとの戦いで地獄を見てきて、いろんな物を失ってきた結果として社会がそうなってし

まった、そうせざるをえない理由や感情がある一方で、差別に抗う人たちの意志がちゃんとある。描くべきはその部分でだと思うんですよね。同じ企画でもアプローチ方法は人によってだいぶ違うと思います。

小島：差別問題をファッションや消費のように、悪い奴を悪く見せるための道具として描くのは、作る側にとって辛いだけなんですよ。『ブラック・ブレット』の差別問題も、物語上でセンセーショナルだから道具として使うというのは違う。呪われた子供たちに対する差別は、結局のところ、東京エリアで普通に生活している人々全体の中に、多かれ少なかれ存在していることが根本的な問題なんじゃないかと思うわけで。

小倉：昔の映画で『エレファント・マン』や『シザーハンズ』ってありましたけど、本人が悪いわけではないけれど醜い風貌に生まれたという事実は厳然と存在していて、じゃあその上でどう乗り越えるのか、人間としてどう愛するのかを描くことが大事なんですよね。状況というのは、テーマに行きつくために描かれるものであるべきだと思っているんです。

小島：デヴィット・リンチもティム・バートンも、異形の者を愛してるんですよ。いいところも悪いところも含めてすごく愛しているから、ああいう映画を作るんでしょうね。

小倉：その愛情表現を作品として極端に描いてるんでしょうね。蓮太郎も延珠が「呪われた子供たち」であることを隠そうとするけれど、いつの日かその出自を隠さなくてもいい世の中になってほしいと願っている。そういう愛や願い、祈りがすごく尊いと思うんです。それを描くためには、東京エリアのような環境を描く所から始めないといけない。

小島：作る上でも、強力なフックになる部分ですね。作品の着地点が見える。

小倉：そう、スタートとゴールが見える。こういう話をしていると、見ていた映画が近くて、話が通じやすいと感じますね。この仕事をする際には共通言語として映画をたくさん見ておいた方がいいですよ(笑)。

神崎：アニメ化する作品を選ぶために、常にマンガや小説を一定量読んだうえで、たくさん映画も見るのって、難しくないですか？

小倉：難しいです！　仕事始めてからはほとんど観られませんから、学生のうちの蓄積が勝負になりますね。何の根拠もありませんでしたけど、高校時代は数多く観る事を自分に課してました。

小島：僕はずっと映画館で見てたなあ。入れ替えなんてなかったからね。東京出てきたときはホントにうれしくて、自分で計画書立てて、映画のはしごをしたもんです。

神崎：ほんとに皆さんシネフィルですね！　直感で映画を見ることを選んで行動していたのはすごいと思いますよ。エンターテイメントを作るうえで、例えばマンガを描くためにマンガを読んでいればいいわけではなくて、積極的に他業種を取り込まないとダメですからね。

小倉：それでも小島さんや脚本の浦畑さんと話していると、明らかに自分の知識が足りてないと感じますし、新しい知識も増やしたいので『ブラック・ブレット』が終わったら久々にいろいろ観まくってやる！と、今から企んでますけどね(笑)。

小島：しかし、若いころに見たものは自分の中に蓄積されているんだけど、どういう形で表現に影響しているんだろうね。自分ではよくわからないんだよなあ。

小倉：血肉になっているというか、『こういうものがいいのだ』というような価値基準の根幹になっている気はしませんか？

小島：もちろん、ハリウッドのエンターテイメント映画が基準になることもあるけど、違う方法論も持っているのは、違う系統の映画も見ているからということかな。

小倉：そうですね。とにかく見たことが大事で、意味もなく人が見ていない、知らない映画ばかり見るという行動も、意味があったと(笑)。

小島：張り合ったりするんだよね、『お前これ見てないの？』って。内容を理解しているわけでは決してなかったりして(笑)。

神崎：絶賛中二病じゃないですか！(笑)

小倉：まさにその世界です。僕の場合は張り合う相手が兄貴だったんですが、いかに相手の知らない映画を探してくるかのやり合いで(笑)。

小島：だいたい映画ファンと呼ばれる連中はそうなるもので、俺たちもなんか小難しい映画見てたもんね。わかったんだかわからなかったんだか、よくわかんないの(笑)。

神崎：でも共通項として映画を見ていれば、すごく慧眼が深い人の考察を聞いた時にも理解力が深まったりしますよね。

小倉：その方向で考えるにせよ、逆にいくにせよ、共通意識として話が伝わりやすいです

ね。共感できなかったとしても理解できる。

小島：要は話が早いということですね（笑）。

小倉：ただそれもあくまで知識でしかなくて、その上で何かしら新しい提案をしていかないと、文化がどんどん先細りして、廃れていきますよね。アニメも全く一緒で、お客さんに対して、なにがしかの新しい提案がなくてはいけない。そう考えるとほんとまだまだ勉強不足だなと。

神崎：ライトノベルで言うと、女の子がかわいいのは前提として当たり前で、プラスワンが必要という部分ですね。エンターテイメントが単純にエンターテイメントとして面白いのは当たり前に期待される部分ですから、それを裏切る部分があって初めてフックになる。

もちろん、読者が期待している部分——延珠がかわいいという要素が大幅に期待を上回っていれば、それ自体がフックになることもあるんですが、『ブラック・ブレット』においては、モノリスや差別問題という要素が、プラスワンになっているのかなと考えたりするんですよね。

小倉：リアルに直観できる問題と、モノリスというありえない異常なもののバランスが絶妙なんだと思うんですよ。だから面白く読めるし、作られた舞台の上で問題やテーマを実感したり共感したりできる。リアルさと異常さのどちらかが強いと、また全然違うものに映ったりもするのだろうなと思いますね。

小島：共感という意味では、ファンの子たちのキャラクターへの思い入れはすごく強いよ

ね。特に幼女たちの死に対して、ビビッドに反応する。
小倉：夏世の死に対しては『なぜこの世界は幼女に冷たいんだ！』っていう反応が強かったですね。一方で『マンホールをたたくと幼女が出てくるなんて夢の国だ』とか。僕もそう思います（笑）。
神崎：まったく作者の想定していない反応だ！（笑）
小島：ある意味、感情移入して見てるってことだから、いいことだよね（笑）。
小倉：もちろん、誰も死なないで済んで、皆が幸せに暮らせていける世界だったら一番素敵だけれど、『そうはならなかった』という現実を受け入れるというのも、『ブラック・ブレット』における、すごく大事なテーマなんじゃないかなと。
小島：もちろん死ぬことが良いとは思わないのだけれど、それこそ今後の物語展開も含めて、蓮太郎がその死をどう考え、どう抱えていくんだというところに繋がっていくんですよ。
小倉：夏世の死がただの悲しいシーンで終わるなら必要ない。そうじゃなくて、夏世の救いと蓮太郎の背負っていくものを描くシーンだからこそ、シリーズとして必要になってくるんだと思うんですよね。そこから逃げちゃうと『ブラック・ブレット』をやる意味がない。
小島：今後も、もっといろいろあるからね。
神崎：大きな山場は、あとふたつ。そこをどう描くか……ですね。
小倉：ところで話は変わりますが、この対談は第1巻の特典なので、（収録される話の）

見どころなども話しておきましょう（笑）。

神崎：延珠がかわいいです。すでに絵コンテの段階で小倉さんとも話していましたけど声がついて、絵が動いたらさらにかわいい。やっぱり監督の力が大きいですね。

小島：でも、やってることは原作にあることをやってるだけですよ（笑）。

小倉：ご本人は絶対に認めないだろうけど、監督の幼女の表現能力は極めて高いと思うんですよね……。

小島：そうかなあ？（笑）

小倉：そういえば第2話の蓮太郎の回想で延珠のお風呂シーンがありますが、絵コンテの時点では延珠は振り返るだけだったんだけど、僕と浦畑さんの二人で「なんでここで立たないんだ！」「チャンスを棒に振ってる！」とか監督に言い寄るという。監督はえーって言ってたのに予想以上にかわいく描いていただきました（笑）。

小島：延珠は、やっぱり2話のラストシーン、いいですよねぇ……。

神崎：非常に刺さるシーンで好きですね。そんなところも含めて、全体的に原作よりもかわいくなった延珠に注目してください。

小倉：第1～4話、ファーストエピソードは見所をはっきり意識して作られていますので、全体の流れを追いつつ、各話のポイントを見つけてほしいですね。4本でひとつの映画的な構成になっているんですが、第2話なら対影胤戦、小比奈の活躍、第4話ならレールガンのシーンなどなど、各話も単独で緩急のある構成になっています。せっかくディスクと

いう続けて見られる形ですので、テレビ視聴時とは違う視点でも楽しんでいただければと思います。

小島：みんな言うことですが、すべて見どころで……（笑）。1話で言うなら、AパートとBパートの見せ方やスタイルが完全に違うところでしょうか。ここまで見せ方を変えた作品は初めてで、浦畑さんの構成の妙だと思いますが、ストレートに見せたいことを集約している。だからこそ、ファンも飽きずに見てくれているんじゃないかな。作っている側としても面白い部分だったので、意識して見ていただけたら面白いかもしれません。そして現在、製作中の最後のあのシーンまで見続けて、泣いていただければ嬉しいです。

（2014年5月某日　都内にて）

ORIGINAL ILLUSTRATOR SAKI UKAI ILLUSTRATION GALLERY

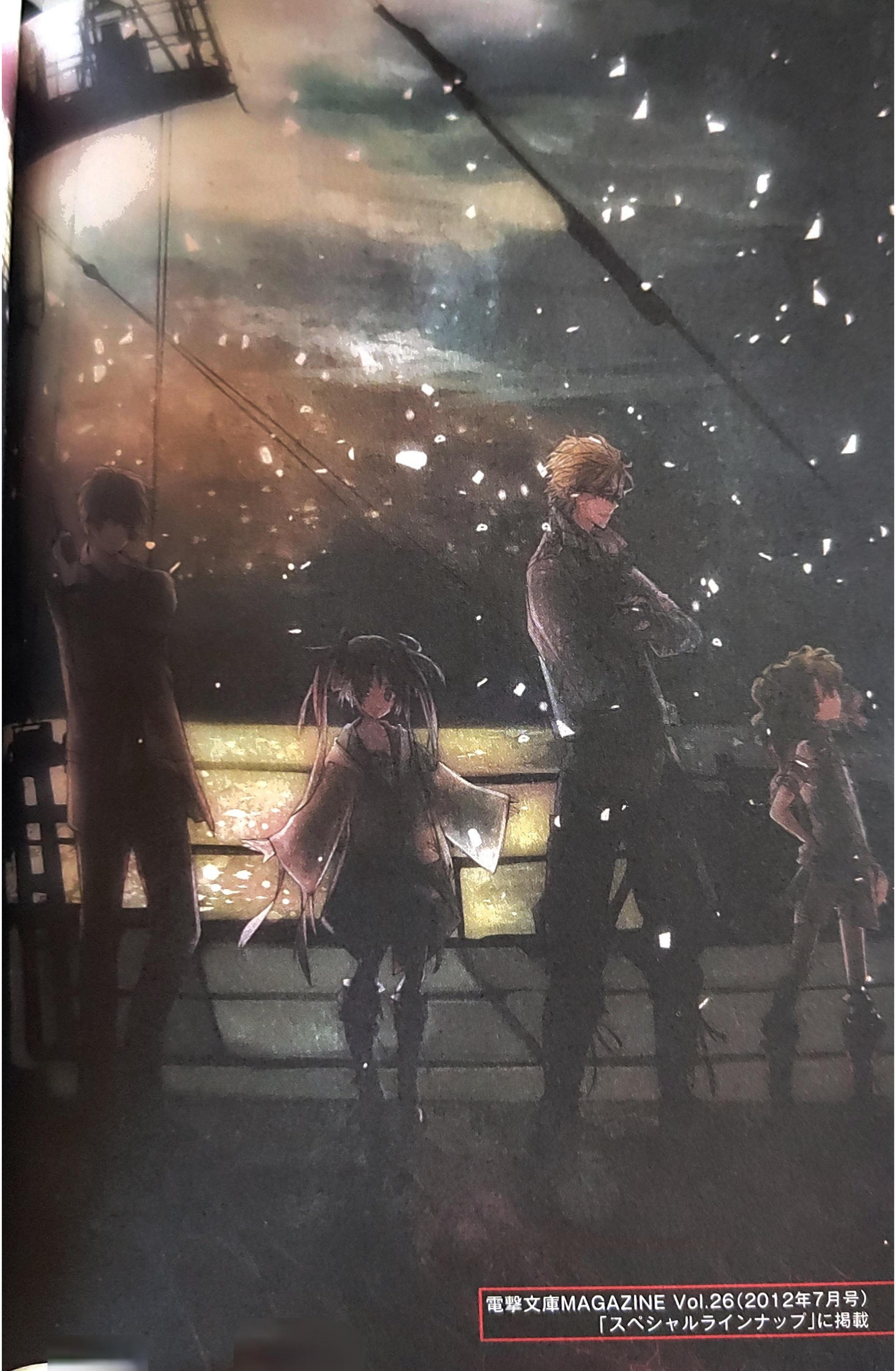
原作イラストレーター
鵜飼沙樹イラストギャラリー

独特のタッチで人気のイラストレーター、鵜飼沙樹。
原作でも多くのイラストを披露しているが、ここでは、
文庫に未収録のレアなイラストを多数掲載していく！
本編ではありえないシチュエーションの美麗イラストに、
目を瞠ること必至!!



電撃文庫MAGAZINE Vol.21(2011年9月号)
「スペシャルラインナップ」に掲載





電撃文庫MAGAZINE Vol.26（2012年7月号）
「スペシャルラインナップ」に掲載





電撃文庫MAGAZINE Vol.31(2013年5月号)
「スペシャルラインナップ」に掲載





電撃文庫MAGAZINE Vol.22(2011年11月号)
「短編『ブラック・ブレット』」に掲載



電撃文庫MAGAZINE Vol.32（2013年7月号）
「『ブラック・ブレット』特集記事」に掲載



MORINOHON& abua COMIC GALLERY

もりのほん&abuaコミックギャラリー

このコーナーでは、『ブラック・ブレット』のコミック版を
担当する２人の漫画家が登場！
躍動感あふれる迫力満点のコミックを披露してくれた漫画家、もりのほん。
ハチャメチャながらキュートなショートギャグで笑わせてくれた
漫画家、abua。
アニメや原作とは一味違うコミック版の魅力を、たっぷりと堪能してほしい!!

《初出》
P87～92／「電撃マオウ2013年12月号」掲載の原稿に加筆・修正したものです。
P93～95／描き下ろし

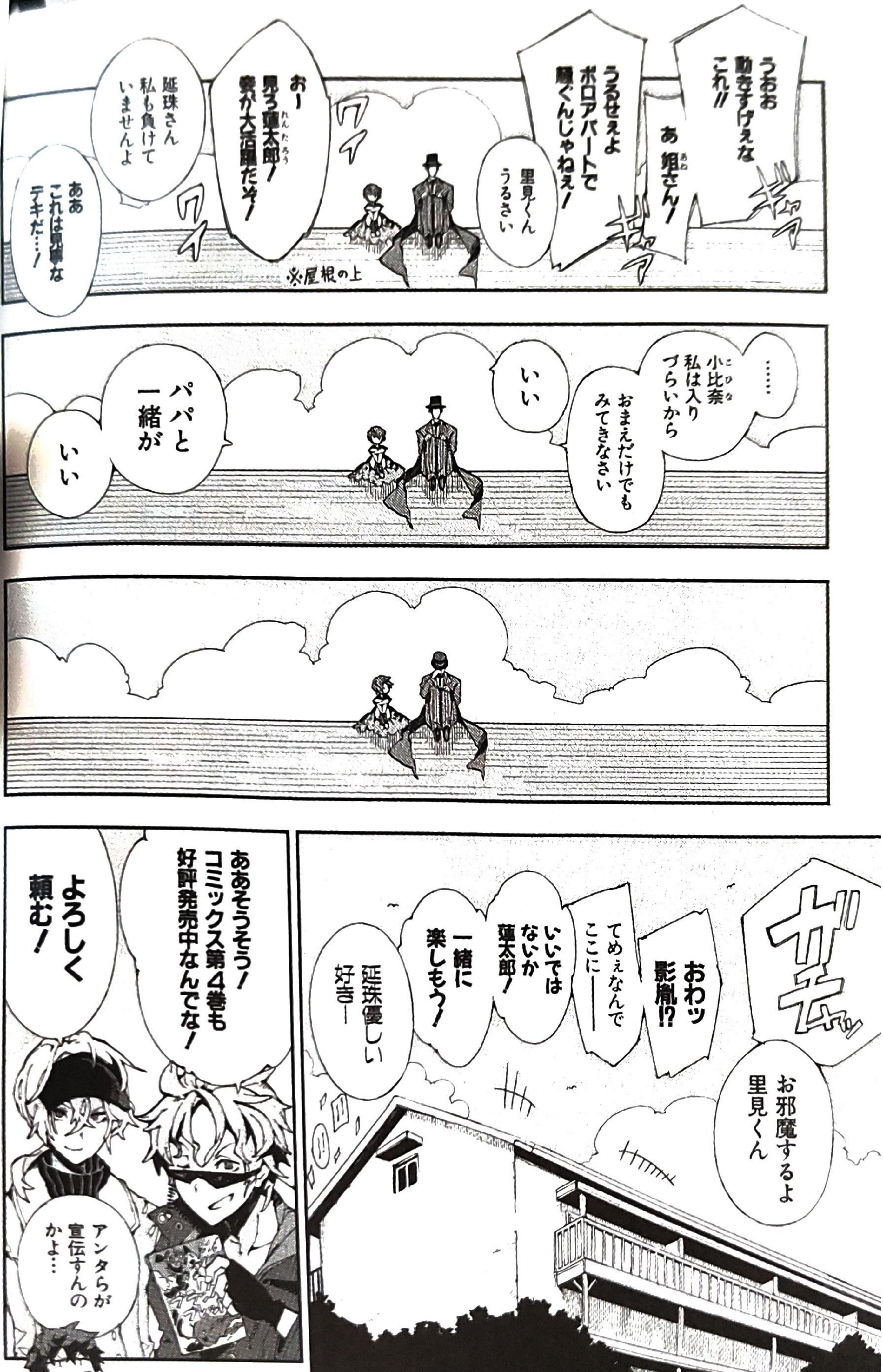

TVアニメ化
おめでとう!
う!
ニメ化
マジで?


というわけで『ブラック・ブレット』の「TVアニメ化」が決定しましたのだ!!
STAFF
原作：神崎紫電（電撃文庫刊）
原作イラスト：鵜飼沙樹
監督：小島正幸
副監督：博史池畠
シリーズ構成：浦畑達彦
キャラクターデザイン：海島千本
音楽：鷺巣詩郎
制作：キネマシトラス
CAST
里見蓮太郎：梶 裕貴
藍原延珠：日高里菜
天童木更：



妾たちも今までたくさん戦ってきたが
それをアニメーションで見られるとはワクワクするな！
そうだな
特に影胤との戦闘シーンがどんな感じになるのか
今からすげぇ楽しみだぜ
ほかにはコミカライズでは泣く泣くカットしたシーンも気になるところだな
ジャーキー
カットしてごめんな
そう！カットと言えば
妾のあられもない入浴シーンが…
あったか？んなもん
ポッ


ガガガ
ガガガガ
ああいう動きも気になるとこだけど
やっぱり私の楽しみなところはこれね！
表情豊かなキャラクターたち！
コミカライズには登場していない彼らに
どんな声が吹きこまれどう里見くんたちと関わっていくのか…
ぜひテレビの前で確認してほしいわ！
というわけでレギュラー権限によりフライング視聴！
里見くん家で
ピッ
えッあんの!!?
ズパァ
ずりぃぞ俺っちたちにも見せろ!!
登場してないって言ったそばからああもうッ



TVアニメも電撃文庫もコミックスもよろしくね♪



BD/DVD
購入
ありがとう
ございます!!
動く蓮太郎たちを
存分に楽しんで
下さいね!!


ブラック・ブレット
BLACK BULLET INTERLUDE FAQ
インタールードファッキュー！
BD&DVD1巻！
発売おめでとうございまーす！
電撃マオウより出張中
どど――ん
電撃マオウから出張依頼よ！
よし延珠さっそくだがこの1巻の見どころを言ってみろ！
まかせろれんたろー！
光る！回る！音が出る！
おおー
おお
子どものおもちゃか!!


待って里見くん！
目が光る
ガストレア
ビカーー
たしかに嘘は言ってないわ
腹の音が出る
ぐきゅううう
回る
影胤
ビフテキたべたい…
いやそーゆーことじゃねーだろ木更さん…
２人とも何を言っておるのだ？
え？
この初回限定BD&DVD特典の天誅グレイブのことではないか！
ピカピカ
クルルル
ドドドーン!!
このブラック・ブレット1巻にそんな特典ついてこねーよ!!
なんだと!? この天誅ガールズ2期BD&DVD1巻発売記念じゃ…
ガーン
アナタのハートに天誅！天誅！
ちげーよ!!
あーもう
結局こういうオチなのね私たち…
電撃マオウの連載もよろしく！

天童民警文庫

ブラック・ブレットZERO はじまりの血 雌伏篇

Blu-ray&DVD 第1巻
初回限定版特典 書き下ろし小説

神崎紫電（かんざきしでん）

発行 二〇一四年七月二日
発行者 NBCユニバーサル・エンターテイメント
編集協力 電撃文庫編集部
デザイン AFTERGLOW
カバーデザイン 株式会社トライボール
印刷・製本 図書印刷株式会社

GNBA-1871/GNXA-1661

TENDO MINKEI BUNKO

BLACK BULLET ZERO

GNBA-1871/GNXA-1661

ブラック・ブレットZERO はじまりの血 雌伏篇

Blu-ray DISC&DVD 第1巻
初回限定版特典 書き下ろし小説



BLACK BULLET

GNBA-1871/GNXA-1661

ブラック・ブレットZERO
はじまりの血 雌伏篇

天童民間警備会社設立までのエピソードと、里見蓮太郎と藍原延珠がイニシエーターとプロモーターのペアを組むことになって初めての事件を綴った完全書き下ろし小説。『ブラック・ブレット』のプロローグが、ここに今、紐解かれる。

その他、アニメ版『ブラック・ブレット』にまつわる、貴重な記事やマンガ、資料集を掲載。原作者・神崎紫電、監督・小島正幸、プロデューサー・小倉充俊のメインスタッフを迎えた録り下ろし座談会の他、コミカライズを担当するもりのほん、abuaによる応援コメント付き描き下ろしコミック、原作イラストレーター・鵜飼沙樹による、文庫未収録のイラスト集など、レアなコンテンツを多数掲載。



神崎紫電（かんざきしでん）

北海道出身東京都在住『第一回小学館ガガガ文庫大賞受賞』のファミレス作家。趣味の一つに自転車を組み立てることがあるのですが、最近元プロの競輪選手に乗車ポジションを見直してもらったら乗るのも好きになりました。嗚呼、こんなに速かったのね、我が愛機。

【電撃文庫作品】

ブラック・ブレット　神を目指した者たち
ブラック・ブレット2　VS神算鬼謀の狙撃兵
ブラック・ブレット3　炎による世界の破滅
ブラック・ブレット4　復讐するは我にあり
ブラック・ブレット5　逃亡犯、里見蓮太郎
ブラック・ブレット6　煉獄の彷徨者
ブラック・ブレット7　世界変革の銃弾

【天童民警文庫作品】

ブラック・ブレットZERO　はじまりの血 雌伏篇

ブラック・ブレット製作委員会

NBCUniversal Entertainment／
KADOKAWA　アスキー・メディアワークスBC／
ショウゲート／AT-X／キネマシトラス

カバー／AFTERGLOW